辛亥革命と日本

王柯 編

藤原書店
はじめに

戦後の日本の思想界では、近代日本によるアジア侵略の行為を正当化する意味においても、また侵略に対する反省、批判の意味においても同様に、「アジア主義」という思想遺産を、過度に理想化しようとする傾向があった。アジア主義とは、近代西洋列強の侵略に対抗するため、アジア地域の民族・国家の連帯・団結を主張する思想であり、国家の独立、強化を目指す、近代的ナショナリズムの土台から生まれた、日本人固有の思想的遺産であった。戦前では、この思想は主として日本のアジア制覇の侵略行為を正当化する理論として民間の右翼や戦時下の政府によって政治的に利用されてきたが、敗戦以後の一時空白をへたのち、高度経済成長とともに始まった、日本人のアイデンティティ再建の過程においてポジティブな思想として蘇った。それは、思想家竹内好の再定義により歴史の政治過程から切り離
それ、一種の抽象化された連帯の思想傾向、『心的ムード』に形を変え、敗戦後の日本人の自我再建、占領によって醸されたナショナリティの再構築に役割を果たす一方、進歩的知識人たちの、戦前の侵略行為に対する多くの自己反省の意味を含んだ、思想上の自己弁解、良心上の自己完結の理論としても再び機能し始めた。そして政治、経済の国際化が進んできた五十一世紀の今日、三つ及びアジアの国々をとりまとめる『共同体』の理論として脚光を浴び、学問、思想の場から政治、経済の場へ『東アジア共同体』という新時代日本の政治、経済戦略の中に利用されようとしている。

一方、アジア主義の思想は決してアジアの共同の思想遺産ではなく、日本という国境を一歩越えると、その存在を知り、かつその主張を理解、賛同するアジア人が殆どいない。なぜアジア主義はどのように生まれ、その本質は何か。『東アジア共同体』の模索とともに『アジア主義』の評価も高まりつつある今日において、改めてこれらの問題を考える必要がある。

アジア主義の思想の本質を把握するため、まずは思想のればをはがして歴史の政治過程に還元し、歴史の経験、教訓に照らしあわせてその思想源流、実践の結果を検証する作業が必要であり、筆者は近年、一連の研究を通じてこのテーマに取り組んできた。本論は、この研究の一環としてアジア主義の一翼を担ってきた、辛亥革命期の大陸浪人に関注を絞る、彼らはなぜ中国革命を支援したか、その接点はどこにあるか、大陸浪人の思想特徴の抽出および行動パターンの分類を通じて、この問題を明らかにする作業を行う。
大陸浪人という集団

日清戦争の前後から、明治維新後の不平士族の系譜を引く旧民権派志士と右翼の一部は、国権主義、アジア主義に目覚め、日本を飛び出し大陸にわたって活動の舞台を求めた。今日「大陸浪人」と呼ばれ一団はほとんどこのような人たちである。時時も、清末の革命の起動期であり、彼等はさまざまな目的で、さまざまな形で中国の革命に関与し、革命の第一線で活躍した者も多かった。中には、山田良政、宮崎滔天、萱野長知、横山庄吉のような、中国革命の理想に献身する者もあれば、私腹を肥やす利権屋、各地を放浪するゴロッキー、軍部の手先を務める情報屋、スパイ、地方軍閥、馬賊、土匪の仲間に入り、ラズモーも少なく含まれていた。前線の革命支援は、のでアジア主義の美談として大きく取り上げられ、美化されていたが、近代史の全過程を見る場合も、後の利権屋のイメージを、大陸浪人の代表的姿ではなかろう。

「大陸浪人」について、「平凡社世界大百科事典」の解釈では「アジアにおける日本の強国化を念願とし、対外政策の形成と遂行に寄与した」との自負を抱いて私的に活動する人々を定義し、またその活動について、「日清戦争、日露戦争では通訳、谍報、破壊活動などに従事し、「辛亥革命後は中国の政府機関、軍閥などの顧問をつとめ、時代が下るにつれてその役割が多様化し、政府や各官庁、軍、政治、企業など特定の資金源を背景に、情報収集、利権の獲得に活動し、満洲事変と日中戦争期以降、「傀儡政権」の官吏や顧問を務め、「体制の中に吸収されていった」と、主として日本の大陸政策の手先と捉
大陸浪人には、いったいどんな共通した思想特徴があるのか。アジア主義の研究者趙軍氏はその《社会

第１部 辛亥革命と日本 134
西洋に抗する思想

西洋に抗する思想を、①在野の民間の意識、②権威的な存在に対する反発心理、③誇り高い言葉を放つ常に激情や義侠心や冒険心理などのようなものに駆られる情熱家心理、④所期の目的や身の安全を考慮するのかわからないので、西洋列強に抗する思想が、①近代的文明の肯定（あるいは部分的肯定）を前提とした。西洋文明と近代の世界秩序の全般を否定し、東西対決、人種対決を唱えるという二種類の対抗パテルンに分けられる。列強とその勢力面のバランス関係に配慮し、関係の改善を唱え対決を避ける政治家の犬養毅は、前者のような政治的リアリズムのタイプであったが、これに対しても日本の国体、⑤皇道精神を重んじ、『東洋道德』を以て西洋に光被しなければならないと唱えた玄洋社系浪人の多くは、後者の東西文明対決論者といえる。
アジアの連帯意識

これも「アジア主義」と呼ばれる所以の、大陸＝アジア人の基本的特徴の一つである。これまでの研究では、
文化的連帯、同じく西洋列強の侵略にさらされる連命の連帯、あるいは同じ反帝制勢力の革命志士間の
「心情」的連帯などの面が多く取り上げられてきた。ここで筆者が指摘したいのは、いまだ、その根
本的な要因—連帯が持つ、西洋への対抗という政治目標から生まれた、弱小国の「合従連衡」の策略、
手段とした性質—が無視され、あるいはあまり重要視されず、かつ心情と手段の因果関係もあまり説
明されなかったことである。もし弱小国による西洋列強対抗という近代アジアの歴史環境がなければ
そもそも連帯行為の必要、またその思想も生まれなかったのではないか。歴史、文化、運命と心情云々
の理論は、しっかり主唱者のレトリックか、後のアジア主義の理論家たちがまとめた理論であり、連
帯を必要とする現実的、根本的要因とは言えない。

策略、手段、方法という基本性格を持つ思想であることが、この連帯がつねに主唱国、大国、強国で
ある日本の優位、日本の国権優先、日本によるリーダー的地位の実現など不平等の特徴を示す所
以であり。アジア主義の研究者、鼓吹者にしてこのように「不本意」な結果は、連帯を理想化する作
業上における効介ものとなるが、逆に開き直って策略、手段、方法として連帯を捉え直す場合、この「不
平等」の結果はむしろ当然の成り行きではないか。日清戦後アジア主義の実践過程に見ると、盟主日本の
アジア君臨や、日本によるアジア諸国への侵略と領土合併の事実は、こうした手段とした連帯の必然性
を考える上で重要である。
在野の反専制的性格

この性格は明治維新後特権を失った不平士族や政争に敗れ下野した元維新指導者の系譜から、あるいは彼女が与した自由民権運動、組織した向陽社（一八七九年）、玄洋社（一八八一年）、黑龍会（一九〇一年）といった民間右翼団体の形態から来たものであり、政治面での失意と、薩長関による「有司専制」への反発が原点であった。反専制のため、時代の潮流に乗って「民権」を標語を掲げながら、近代的立憲政治への理解はほとんどないため、好意的情感、士族的「仁義」、「忠君」尊皇など封建的・道徳意識の判断に任せて、つねに暴力、陰謀策動など非常手段をたとえに問題の解決を図った。来島恒喜（一八六六年生）の暴力干渉（一八九〇年）・朝鮮甲午農民戦争の際における浪人組織天佑隊の開戦策動（一八九四年）を政治の手段としたため、在野の少数派の地位に甘んじざるを得なかった。一方、アジアにおける日本の国権拡張と権益確保の大方針において政府、軍部の大陸侵略の手先を務めたことである。
5. 志士的性質

大陸浪人たちはよく自称する「志士風」のことである。国家の前途を憂い、御国に尽くす献身精神である。士族出身者が多く占める。前近代的武家の倫理道徳の名残であるが、①国益と国権のために貢献する対外膨張的政治指向と、②国が違えるどの同じ朋友、同志、人間に対する忠誠と友情を両立する。変動しきれない現実に耐え、将来の可能性が潜む、未知の大陸での冒険、革命行動に駆り立てたと思われる。

④大陸雄飛の志、革命、冒険への憧れ

趙軍氏がいう大陸浪人の「社会的性質」の一つで、旧士族出身の不平者、政治失意者たちに共通した特徴でもあった。儒学的「修身齊家治国平天下」、「大学」の雄志を抱き、維新後の政界に進出するが、政敵に敗れて下野し、活動の場が失われた。一時、時流に従って議会開設、憲法制定を目指す自由民権運動に身を寄せるが、日清間で朝鮮の宗主権をめぐる争奪が激しくなった甲申事変（一八八四年十二月）の後、国権獲得の方向に転換し、「征清」、「征韓」の目標に自らの活路を見出すようになった。失うものは何もない、まさしく夢、野心のみを抱く流浪志士の輩であった。こうした日本国内における閉塞した境遇と平天下の宿志は、彼らを、将来の可能性が潜む、未知の大陸での冒険、革命行動に駆り立てたと思われる。
⑦ 利権、領土拡大主義

（1）利権、領土拡大主義

日本の利権、領土の拡大を目指すものであった。連帯の本質を示す、大陸を含む、大陸経済に象徴されるように、まず朝鮮、満洲から着手し、大陸における西洋列強の勢力を追い出し、日本を東邦に切り替える。
の一つである。

(8) 先覚者としての盟主意識

これは、(8)の尊皇愛国思想」と関わりを持ち、また「開化の指導者、文明の伝播者」と自己認知する、自由民権家の中の、尊皇愛国思想を拒む日本の精神を、先ず東洋に布き、更にこれを全世界に推し拡げるという民族的使命感を抱く大衆主義思想であった。常に小国、弱国の誇張、保護主義的優位を絶対化する主張である。

(9) 平等思想、民衆への信頼、人道思想

この点は大陸を超える全ての普遍的特性ではないが、宮崎滔天、萱野長知等一部の浪人志士が有する思想特徴である。宮崎の「四海兄弟、自然自由の境」という革命目標の認識や、「支那人」人民は決して軽侮すべき人民に非ず。寧ろ英霊の強よりも恐るべき人民なるを信じます。支那人は将来の世界に於て実に絶大無比の勢力者たるのを忘る可からず」との異国民衆への信頼、期待、及び萱野長知の「人道」を「忠君」の上に置く主張一方、余輩の信する一国存亡興廃は単に主権者の存亡興廃に関知せず、人道の興廃如何によって打算する。余輩を云為しながら其民を坑にし道義を没了するものあらば、之れを改良の道を守る道徳君を唱ふるの意味を絶対的にはみえるものので、所謂群倫を逸せるもの所以也から、その一面が現れる。(8)の「先覚者としての盟主意識」に相反する思想というべきもので、国境を
越えた人間同士の友情と、中国革命の理想への献身的行動を生み出す原動力である。厳密に言うともは
やナショナリズムを原点にしたアジア主義の思想特徴ではなく、むしろ民衆思想、革命思想の一部であ
り、また宮崎の「四海兄弟」の思想とはさらに、若く時信奉したキリスト教の博愛思想の色彩が窺われ
た。少数派の思想ではあるが、存在の意義が大きいので、あえて大陸浪人の思想特徴の一つに取り上げ
た。
以上の（1）から（9）の内、（1）から（5）及び（9）の六点は連帯を促進する要素であり、（6）（7）（8）の三点は逆に連帯を根本から揺るがす要素であった。近代史上における、西洋列強の
脅威、近代国家建設の使命感、国家間ナショナリズムの対立、衝突など変転する政治背景の下でこうし
た多様な思想要素が複雑に絡み合って葛藤し、個々の大陸浪人のキャラクターに現れ、その集団全体の
複雑な政治的性格を彩ったのである。

三 革命期におけるパターン分類

以上に並べたのは、アジア主義者全体に通じる、大陸浪人の代表的思想特徴だったと言えるが、さ
らに本論で取り扱う五人に対象を絞って分類すると、次のような三つのタイプに分けられるのではない
かと思う。

第一のタイプは、頭山満、内田良平に代表される、大陸浪人に普遍性のある思想原型というべきタイプ
で、以上（1）から（8）までの思想特徴のすべてを有している。中でも、反西洋的アジア連帯の思

想、反対制の在野的立場、大歴期人と冒険、献身精神と志士の忠誠、信義などの性格は、彼らを中国革命をテーマとするアジア主義の本質を表す、尊皇愛国思想、国権拡張意識、帝王主義などの要素を合わせ持ったため、その一時的な革命支援の実践活動も、最終的には日本の国権拡張と日本帝国主義による大陸制覇の結果に流れる必然性がある、と考えられる。

孫文が晩年の一九四四年十一月、日中間の不平等条約の処理のため来日し、盟友の頭山満に協力を求めていた時、頭山は関税自主権の確立と治外法権の撤廃面に協力する姿勢を示したが、《満蒙における特殊権益については、これを決して譲ることのないことを述べ、孫文は失望させた。その直後（十一月二十一日）、孫は、神戸女学校で《大アジア主義》と題する講演を行ない、《西洋の覇道の番犬となるのか、どうして、革命萌芽期の、中国革命家と日本大陸浪人の間に結ばれた掟い友情、信頼は、大西洋の王道の国であるのかも特徴である。《大西航空の排外思想も大いなる興亜運動》である。}

一方、思想的には、幕末期の尊皇攘夷思想のレベルにとどまり、政治的にはあまり進歩しなかったが、流派は、《攘夷》の主張に見る排外感情。《征韓論》にある大陸制覇思想の延長線に位置し、近代的国際戦略思想ではなく、幕末思想家佐藤信満、吉田松陰らの大陸経絡の流れを汲む。一種の封建时代的の妄自尊大的華夷秩序的論理の色彩が濃かったと指摘される。さらに中には、このような単純な封建的政策
意識さえ持たず、ただ先制的進出による商売面での独占的利益、利権を図り、あるいは神秘、未知な大陸に対する好奇心、馬賊に憧れる冒険心等の理由で各地に放浪し、動乱中スパイ、別働隊として日本の大政に利用される者も多く含まれていたと思われる。

第二のタイプは、組織的には玄洋社など国家主義団体に属しながら、国境を越えて革命の理想に献身する少数派の大陸浪人のタイプで、宮崎滔天、萱野長知はその代表といえよう。以上の（5）（6）（8）の尊皇愛国思想、国権、利権思想、野道思想、人道思想の特徴が見られる。また「革命」——宫廷の「支那革命主義」——萱野の「有道なる腕力」の実現——を終極的理とする思想特徴が見られ、この理想は、彼らを日本という国境、また天皇制という国体を乗り越えさせ、一闘革命の可能性と将来性に富む中国を最終の活躍の場と選定させ、また中国革命の指導者孫文を誠心誠意奉者として選ばれたと思われる。さらに、他のアジア主義者と違って、宮崎と萱野には、「共和同盟会」、「設立同盟会」、「社会的同盟会」を結べば「世界の現状は天足歩一歩を進む一国が見えられる。宮崎は、清露両大国をも「共和同盟会」、「設立同盟会」、「社会的同盟会」を結べば「世界の現状は天足歩一歩を進む一国が現れる。萱野は、ロシア、中国、日本の到来と相互呼応を予測し、そして「人道、国際、平和」の発展が観察される革命の到来を歓迎し、世界人類を救済するの原動力たることを切望したのであった。
このほか、前に触れ、下層社会に根付く宮崎滔天の「四海兄弟」の平等意識、菅野長知の人道、自

由思想も、彼らをして革命の指導者・先覚者ではない、中国革命の一兵卒としての平等の立場を保持さ

せたのである。

大陸浪人の多数と同様、彼らの思想、思惟方法には志士の単純、短絡の弱点がある反面、深い信念と

理想に富み、それに献身的殉熱と平等な庶民的感覚を加わり、実践面における中国革命の忠実な戦士に

なり得たと思われる。大陸浪人の本質の一つである国権意識と尊皇思想のハードルを乗り越えたところ

は、宮崎と菅野の共通した特徴であろう。

第一のタイプに見た大陸浪人と中国革命家の連帯は、自国ナショナリズムの背景の下で成立した、呉

越同船の一時的な理想、境遇、人情面の連帯であったのに対して、宮崎と菅野の場合、「革命」を媒介

にした立場の移転が特徴であり、国境のないインターナショナリズムの色彩を帯びる連帯だったと言え

る。

第三のタイプは、犬養敏に代表される在野的政治家のタイプである。犬養は第一線で活躍する大陸浪

パプリに欠かせない重要な役を演じた人物でもあった。アジア主義的立場から日本とアジアとの特殊

な歴史的・文化的・政治的・経済的伝統関係を重んじる一方、日本を「黄人種の中の最も早く進歩した文

明」と見て、アジア地域における日本の支配的地位、指導的役割と経済、政治的優位を主張しつづけ

た。同時に知識人、政治家の立場で国際秩序、国際関係の現状を尊重し、決して頭山満のような短絡な

反西洋の排外主義者ではない。
大陸政策に関しては、より長い視野での国家戦略思想に基づいて現実主義的な利権獲得と、平和的「富源」の開発と「大陸に経済的結合」を唱え、かつて「東海経済新報」を主宰した経済人としての一面を窺わせる。また、国権獲得の立場で大陸における日本の特殊権益の確保を主張するが、両国間の友交を破壊し、「第三国の疑惑を招く」という理由で恩義を裏切った大隈重信首相に反旗を翻し、「対華二十一条件要求」を「大失敗」と批判する不羈の姿勢も見られる。

犬養はまた、志士、同志として孫文など中国革命の指導者たちと平等、対等に渡り合うが、日本の利益、利権重視の戦略的視点から、宮崎と菅野のように、中国革命の理解に対する理解と忠実さはない。

一九一一年辛亥革命の時、革命勢力の成功に懐疑的であり、日本に都合の良い「安定」、勢力の誕生を画策するため、中国に渡った革命派の孫文、黄興と梁启超の康有為、梁啓超、及び清朝の旧臣岑春煊を「抱合」させようとした。この画策は盟友孫文の不快を買ったことがよく知られるが、その後討袁（世凱）の二次革命時も、共和制主張の南方政府（革命政府）を支持するか、帝制復帰の袁世凱北方政府を支持するかについては、功利主義の立場で「帝制でもよい共和制でもよい」となく日本と平和の交際が出来さえすればいずれでも構わぬと放言し、革命に対する無節操な一面を見せた。

犬養にとっては革命時に「中国における日本の政治的優位の確立の方が最重要の課題であったので、彼は「中国民族主義の台頭という事態の推移を知りつつも、あえてそれを無視し、革命派の孫文より袁世凱を中国統一の、新たな担子として期待するまでになったのであった。時任英人氏が指摘したように、日本の中国政策を「補完」するところに目的があった。このような自国中心の立場で平気で中
国革命とその指導者孫文を裏切る無理の政治姿勢が、かつて政治家としての養をもとし、信義、友情、義侠心を有するため、アジア主義者や政界とのパイプ役を務め、大陸猿人、精神的指導者とも退かれた所である。そのほか、書道家として中国の伝統文化に対するこよし偏愛と中国文化・歴史的、政治理想的連带の要素を見出すことができ。これは、辛亥革命時に中国友人とその関係を支える場合、あるいは最大公約数の思想傾向を把握する場合、は、ある国権拡大および日本による大陸支配、制覇の政治志向は否定できないだろう。また、異なる国家間の利益と人間関係の信頼を両立させ、前面の政治目的の達成を図るものではなかろうか。革命前、国家に対する忠誠か、友人に対する信義かという二者択一の決断に迫られた時、日本の革命家や日本関係者がそれぞれ選択したのは、後者ではなく前者であった。
むすび

以上において辛亥革命における大陸浪人の思想特徴及びタイプ分類を試みてきた。複雑、多様な浪人集団についての整理は幾ばくかの結果が得られたと思う。結びに代えて、筆者が最近考えてきた、日本のアジア主義評価の方法を提示し、大陸浪人の評価、理解に資したい。

アジア主義的連帯——すなわち本論で触れた大陸浪人と中国革命の接点——を見る時、一番重要なことは、この「原点」の意味は、連帯活動の出発点だけに限らず、その帰結点、目的に含まれるものである。この意味でいうと、連帯とはしょせん、ナショナリズムに基づく政治目標——独立した近代国家の建設、または国権、国益の回復と拡張——は、大陸浪人と中国革命家を結びつけた連帯の基本的接点だったのではなあ、一時的な政治形態——時的な合衆連衡の方法、目的達成の手段、あるいは国家間の政治利害を超脱した政治の理想——にすぎず、連帯が成立したその時からいつか終結、破綻を迎える必然的要素がすでに内包されていった。

以上のようなく、目的と手段をきつめて分析する方法で大陸浪人と中国革命の接点を分析する時、手段としての一時的な連帯行為を過度に理想化、抽象化。永久化するのではなく、むしろ連帯を生みだした特殊
な政治条件、時代背景の把握が重要な研究課題になっている。つまり、どのような条件の下で連帯の行為が生まれ、また、どのような条件によってこの連帯が破綻するか、である。

今まで日本におけるアジア主義研究と評価の問題点は、突き詰めて考えれば、目的と手段を顛倒させ一時的、また手段、方法としての連帯を永久化、目的化し、理想化させるようとした努力にあったので、はなろうか。

本論を通じて、大陸浪人という集団の全体に渡って中国革命への関与の普遍性が認められた。その原情であり、②国家の利益・利権獲得の目的からきた利用、策動、便乗であったと言える。本来矛盾するはずの二つの動機であるが、革命という非常時の特殊な歴史条件の下で、一時的に国家の利害関係を超越する無私、献身的革命支援の場面も見られる。この時に先ず把握すべきは、この連帯が持つ一時性および手段とした性格であろう。大陸浪人の思想土台には、普遍的、国益、国体（尊皇）思想が根強く存在している事実は、けっして忘れてはならない。

一方、少数派であるが、宮崎滔天、萱野長知のよう、純粋な革命思想を抱き、中国革命に献身し、大陸浪人が存在するのも事実である。その貴重な行為を歴史に記録し評価する価値はあろうが、歴史記録の真実性、評価の公平性を期するため、その大陸浪人の集団における数値面での希少性を把握すると同時に、革命時における特殊性の特徴も認識する必要がある。革命という非常時の条件の下で、人志士と中國革命家たちの連帯行為はナショナリズムの壁を一時的に乗り越えられるかもしれないが、その後両国政治のナショナリズムへの必然的回帰とそれに伴う国権意識の上昇には、連帯の理想と情熱...
幸福の出現の必要性を認識しなければならぬ。本論で触れた、革命成功後の不平等条約の改正問題をめぐって孫文と頭山藩の信頼関係に生じた絆はその代表例と言えよう。宮崎滔天は、北伐革命後の中国のナショナリズムへの困惑が北京を見せる。辛亥革命期の大陸浪人と中国革命の関係を見るとき、このようにしてナショナリズムという近代的国家主義の原点を軸に「連帯」の行為を評価する必要がある。これはまた、大陸浪人の評価に限らず、アジア主義という日本近代の思想遺産を評価するための重要な尺度でもある。

注
① 竹内好『アジア主義の展観』アジア主義研究会、『アジア主義』筑摩書房、一九六三年、二一〜三頁。
② 拙著『アジア主義と日清・日露戦争』西田耕織『概説日本近代思想』第四章、ミネルヴァ書房、一九九一年、参照。
③ 黒龍会編纂『東亜先覚志士伝』下巻に於て、大陸浪人を中心に一〇八名の志士の伝記を並べているが、その中で、宮崎滔天、萱野長知のような日本の国益を問う心から中国革命のために献身した例はどうか。
④ 《平凡社世界大百科事典》第二版。岡部牧夫執筆。
⑤ 趙軍『アジア主義と中国』亜紀書房、一九九七年、九頁。
⑥ 最近の例を挙げると、昨年（一九四〇）夏、上海万国博覧会場で、日本館の特別展「孫文と日本の友人たち」の特別展が催されていた（六月十七日〜七月十四日）。
⑦ 前掲趙軍『アジア主義と中国』一五〜二〇頁参照。
⑧ 特に政治家犬養毅氏の場合、盟主日本の指導下におけるアジアの団結を訴えるが、同時に列強とのバランス
ス関係にも配慮し、アメリカとの親密関係を強調したり、英仏との対抗を否認し、日英同盟の義務を認めたり（東洋平和のための結言）（木堂清新）（九三六年、アジア主義者たちの声（下））書評会、九三三頁。現存の国際政治環境を受け入れた上で、欧米との対抗意識が感じられるが、西洋文明の排斥と人種対決の思想はなかったと言える。（九三五年、アジア主義者たちの声（下））七三頁参照。

9 頭山満「日本の世界に対する大使命」（九三九年、アジア主義者たちの声（下））七三頁参照。また、内田良平も「彼の西洋の諸国の唯物文化的の侵略を克服しなければならぬ」という「アジア精神」から「日韓合併の意義を論じたのであった」（日韓合併思い出）（九三五年、前掲アジア主義者たちの声（下））二五一頁。

10 竹内はのアジア主義論が求めているのはこの心情的連带の価値であるが、連帯を「手段」にしていない点は問題であろう。「前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていっている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段」にしていられている点は問題であろう。前掲竹内好『アジア主義』（一四頁参照）に「侵略」を連帯の「手段'
18「運縄に於ける支那史」国民新聞八九六年十二月前掲「宮崎滔天全集」巻五、七〇頁。
19「露清の革命は急進なる」久保田文次編幕末改革史料集高知市民図書館二〇〇一年一〇月四頁。
20嵯峨隆「孫文の訪日と大アジア主義」講演について「国際関係比較文化研究」静岡県立大学二〇〇六年一月、「支那史研究月報」五〇〇三七月、二十七頁。
21「七九年九月、一二月事前掲「宮崎滔天全集」巻五、七〇頁。
22「支那史と明治溟海記事」大同書店一九〇七年三月、一九〇六年〇月、五一頁。
第三号、前掲『宮崎滔天全集』巻二、六〇八頁。

25 崇野長知は革命論理についてのようすに述べている。『若し理想的を遂行を期するならば、我が身を
捧げて理想の為、理想の贔屓即ちれ最後の手段たる有道の文字を挙げて起也。』現実の解決是有道
なる腕力あるのみ、腕力の本領、『革命評論』一九〇六年十一月、前掲『崇野長知、孫文関係資料集』二
四頁。

26 君主に対する忠誠は、宮崎と崇野を含め、大陸浪人層の普通の従徴というが、宮崎と崇野の場合、その
忠誠対象を日本の天皇から中国革命家孫文に据え変えられたと考えられる。宫崎は、孫文仙は一紀の大人物
である。悲しくも、現代の我が日本には朝野を通じて彼に比すべき人物がない。其学問、其識見、其抱負、
其能力、其忠誠、其操守何れの点に於ても、旧領日本の人何人よりも傑れて居る。』と評し（前掲『宮
崎滔天全集』巻一、五〇四頁）。

27 『支那留学生就いて』、『革命評論』一九〇六年九月、前掲『宮崎滔天全集』巻四、六二頁。

28 崇野長知『陳清の革命は急速なれ』、『革命評論』一九〇六年九月、前掲『崇野長知、孫文関係資料集』一
五頁。

29 慶應義塾の商務、朝倉英之が出資した雑誌。一八八〇年八月に創刊、一八八二年十月に廃刊した旬刊経
濟雑誌。犬養は主筆を務め、自由貿易主義を掲げた田口卯吉の『東京経済雑誌』と対抗して、保護貿易主
義を唱えた。

30 狗養は大陆進出の理由について、日本は領土的野心を持たないが、年々増加しつつある所の人口をしても
相当の食物を得難いと云うため、積極関係よりしてこの方向入る必要を論じた。欧
洲大戦後の課題、前掲『アジア主義者たちの声』上卷、九五頁。なお、犬養の政治経済利益重視の従徴について、
時任英人も論文『犬養と中国』『政治経済史学』一九三〇、一九四四年十一月、三〇頁において指摘して
いた。
村浩一「犬養毅と中国革命」 『中央公論』 一九六五年一月号 四〇頁。

「南北交信」に就いて 『木堂書談』 一九三一年 前掲。「アジア主義者たちの声 一九〇 八一頁。

同右、一〇四頁参照。

時任英人「犬養毅」 『レベルリズムとナショナルリズムの相剋』 論創社 一九九一年 八〇八一頁。

例えば、滔天は孫文を「現代の日本人の何人よりも優れて居る」と褒めたとき、只十余年一日の如く苦節を全うした点において犬養木堂の彼に比すべきものであると言う。犬養は孫文に続く人格者としていた孫逸仙は「一代の大人物」、前掲「宮崎滔天全集」巻一、五〇四頁。

犬養の書はすべて漢詩、漢文で書かれ、決して多くの日本書家のように「かな」を書にしない。また、中国の革命家と交流を始めてから高名な文人呉昌碩（「八四四」一九二七）の刻印を愛用し「木堂印譜」に作印も依頼していた。呉の刻印が一尺を確認されている、「一九二年辛亥革命時日本に寄贈した時、もっていた呉昌碩に『宝蘭辛酉主人』の作印を贈った。そのほか、康有為からの書簡も扇に表装し珍藏着していた。

厳密に言うと、国家間の連帯と言うより、中国の革命家との人間としての人情的連帯である。41 益野長知は晚年、北伐革命後の中国のナショナルリズムの高揚に困惑し、孫文の「大アジア主義」の理想を掲げて日支間の関税撤廃を訴え、さらに国際撤廃を求める平等な「興亜連盟」を作ろうと、としきりに訴えた。「日支国際撤廃を目標として一九三六年四月、前掲『益野長知・孫文関係資料集』一〇〇頁参照。
執筆者紹介（配列順）

桜井良樹（さくらい・りょうじゅ）
1957 年生。麗澤大学教授。上智大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程修了。博士（史学）。主著『大正政治史の出発』（山川出版社、1997 年）、『辛亥革命と日本政治の変動』（岩波書店、2009 年）等。

趙軍（ちょう・ぐん）
1953 年中国・開封生。千葉商科大学商経学部教授。華中師範大学大学院博士課程修了。博士（歴史学）。主著『辛亥革命と大陸浪人』（中国大百科全書出版社、1991 年）、『大アジア主義と中国』（亜紀書房、1997 年）等。

安井三吉（やすい・さんきち）
1941 年東京生。神戸大学名誉教授。孫文記念館館長。東京大学文学部卒業。歴史学。主著『孫文と孫戸』（共著、神戸新聞総合研究センター、補訂版 2002 年）、『帝国日本と華僑——日本・台湾・朝鮮』（青木書店、2005 年）等。

姜克實（じゃん・くろし）
1953 年中国・天津市生。岡山大学教授。早稲田大学大学院修了。博士（文学）。日本近代史。主著『石橋謙山の戦後』（東洋経済新報社、2003 年）、『日本近代社会事業の思想』（ミネルヴァ書房、2011 年）等。

汪婉（おう・えん）
1959 年中国・北京市生。中国社会科学院近代史研究所研究員。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。歴史学。主著『清末中国対日教育観察の研究』（汲古書院、1998 年）等。

呂一民（ろ・いったいみん）
1957 年生。浙江大学教授。北京大学歴史系卒業。主著『20 世紀フランス知識人が歩んだ道程』（浙江大学出版社、2001 年）、『フランス通史』（上海社会科学院出版社、2002 年）、『フランスの興亡』（三秦出版社、2005 年）等、訳著『マルティン・ハイデッガー』『フランス史——起源から現代まで』（共に商務印書館）等。

徐立望（じょ・りっぽう）
1975 年生。浙江大学歴史系副教授。北京大学大学院修了。博士（歴史学）。主著『嘉慶道光時期の揚州常州区域文化の研究』（浙江大学出版社、2007 年）等。

松本ますみ（まもと・ますみ）
1957 年金沢市生。敬和学園大学人文学部教授。新潟大学現代文化研究科修了。博士（学術）。近現代中国の国民統合。主著『中国民族政策の研究——清末から 1945 年の民族論を中心に』（多賀出版、1999 年）、『イスラームへの回帰——中国のムスリマたち』（山川出版社、2010 年）等。

沈国威（しん・こくい）
1954 年中国・遼寧生。関西大学教授。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。日本語学。主著『近代日中語彙交流史』（笠間書院、1994 年）、『近代中日語彙交流研究』（中華書局、2010 年）等。

濱下武志（はまし・たけし）
1943 年生。東京大学東洋文化研究所名誉教授。龍谷大学国際文化学部教授。東京大学大学院博士課程中退。中国近現代史。主著『中国近代経済史研究』（汲古書院、1989 年）、『朝貢システムと近代アジア』（岩波書店、1997 年）、『香港』（1996 年）、『ồmoz入門』（2000 年、共に筑摩書房）等。
編者紹介

王 柯（おう・か）
1956年生。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。神戸大学大学院国際文化学研究科教授。歴史学。